朝日選書 19

ドレフュス事件

大佛次郎

大佛次郎〈おさらぎ・じろう〉
1897年（明30）　神奈川県生まれ
東大政治学科卒　小説家
本名野尻清彦　1973年歿
「大佛次郎ノンフイクション全集」「大佛次郎自選現代小説」「大佛次郎時代小説全集」（以上朝日新聞社刊）

ドレフュス事件　　朝日選書 19

1974年9月20日　1刷発行　　定価 720円
1976年11月20日　2刷発行

著　者　大佛次郎
発行者　角田秀雄
発行所　東京・名古屋 大阪・北九州　朝日新聞社
〒100 東京都千代田区有楽町 2-6-1
03(212)0131(代)　振替東京 0-1730
印刷所　明善印刷株式会社

© T. Nojiri 1974／装幀・多田　進

0395-259119-0042

大佛次郎著

ドレフュス事件

朝日選書 19

ドレフュス事件
ブゥランジェ将軍の悲劇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

ドレフュス事件

密書　九

行け、ユダ！　二〇

悪魔島　三〇

売国奴エステラージー　四〇

ゾラの審判　五六

敗軍　八六

軍人の悲劇　九二

死線を守る　一二

最後の切札　一三

ブゥランジェ将軍の悲劇

シュネブレ事件　一四

将軍の出発　一六〇

その年の巴里祭　一七六
将軍のエルバ島　一八四
ウイルソン事件　一八九
マロニエの家　一九三
貴族の客間　二〇四
檻を出た獅子　二一三
ブゥランジスムの進軍　二二七
紅き石竹党　二三四
アウステルリッツの太陽　二四〇
ナポレオンの夢　二五五
鉄の人　二六二
四月一日　二七一
政治高等法院　二八一
この一戦　二九一
太陽は地に堕ちぬ　二九六
あとがき　三一九

ドレフュス事件

昭和五年四月―十月「改造」に発表

密書

千八百九十四年の夏のことである。巴里にある参謀本部情報部を中心にして仏蘭西陸軍の部内に尋常でなく昂奮した空気が感じられた。外部と厳重に遮断した密室の会議に。上官たちの部下に向ける苛立ったような態度に。あわただしい人の出入りに。――参謀総長のボアデッフル将軍は無論のこと、陸軍大臣のメルシエ将軍までがこの渦中に在って、何事か焦慮し、また憂いている模様だった。

この衝動を起した原因になっているのが、今、高官連がかわるがわる睨み見ている一通の手紙だった。この手紙は、紙質はまさ目の入った極く薄いものであるが、ちぎってあって一葉の紙が上下に破れて三つになっていた。けれども、この三枚をつなぎ合せると、書いてある文面が残らず読み取れる。

それにはこう書いてあった。

「その後御面会の御希望に接せざるも、小生は下記の興味深き情報をお知らせ致すべく候。

一、百二十粍砲の制動機及びその用法に関する文書、

二、開戦と同時に戦線に送らるる軍に関する文書、（新作戦計画に依りて変更せらるべきもの）

三、変更せられたる砲兵の組織に関する文書、

四、マダガスカル島討伐に関する文書、

五、野戦砲兵の射撃教程案、（千八百九十四年三月十四日の分）

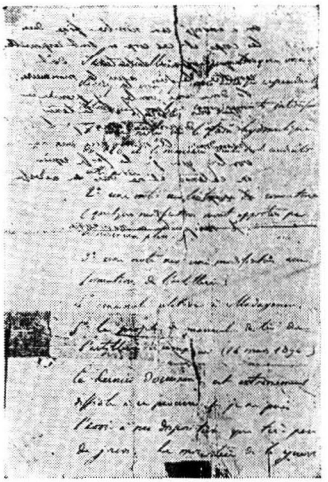
最後の書類は最も得難きものにして、小生には数日中に入手の見込み有之候。右は陸軍省に於て一定数を各部隊に配布し、その後の責任は各部隊に於て厳重に負担し、携帯将校は演習後に漏れなく返却致すことに相成居り候。

御希望の分はお渡申すべく候右は後に小生に御返却相成度候右は小生に於て厳密に謄写御送付申上ぐるこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

とを御承諾なき場合に左様仕るべく候。」

これは、あきらかに仏蘭西陸軍の機密を売ろうとしているのだった。それも、この手紙は巴里にある独逸大使館から盗み出されて来たものだから容易ならぬことである。



問題になった密書

昔仏戦役はつい昨日のことであった。二十四年の歳月が経っていても、戦に敗北して首府の巴里を敵に蹂躙され屈辱的な降服をした仏人は独逸人を憎悪する新しい民族的な伝統をこの間に作り上げていた。仏蘭西の空には、「復讐」「アルザス・ローレエヌの回復」と、二つの相言葉が赤く書かれていた。マルセイエーズの歌がこんなにも仏蘭西人の血を湧かしたことも大革命の時以来のことだった。独逸軍が侵入して来たことなど知りようもない小学校の生徒までが、教壇で叫ぶ先生たちの熱狂に感染して、呪われた前代の遺産を自分たちのものにした。ボッシュ！　独逸人と呼ばれるのが、その頃仏蘭西人が何よりも我慢出来ない悪口になっていたのである。

参謀本部情報部と連絡して、ひそかに独逸大使館に入っていたブリュッケルと云うスパイが、新しく伯林から赴任して来た武官のシュワルツコッペン中佐の手文庫の中から、この破れた密書を盗み出して来たのである。

――ボッシュのシュワルツコッペン中佐に買われている仏蘭西人があると云うことなのだ。

更に手紙の内容から云えば、この仏蘭西人が、名誉ある仏蘭西の軍籍に在る者だと云うことだ。

ブリュッケルと云うスパイは当時仏蘭西の参謀本部が

独逸大使館へ入れて置いたバスチアン夫人と云う女のスパイと、本部情報部との連絡役をして大使館の門衛を勤めているアルザス人だった。普仏戦争の時に、独逸の「スパイの父親」と云われるウイルヘルム・スチーベルは、四万人の部下をプロシャ軍隊の侵入計画地へ入れて間もなく起る戦争の土台工事をしたと云うくらいで、これに懲りた仏蘭西参謀本部では、この頃さかんにスパイを使って独逸側の秘密を捜っていたのである。

参謀総長は内閣の命令で極秘裡に犯人を捜索させた。この手紙は封筒がないので郵送したものかどうかも判じ難い。捜索は、筆蹟の審査に依るよりほかはなかった。これには暫く何の得るところもなかった。その内に参謀本部の第四局の次長をしている、ダボヴィル中佐が休暇から戻って来て、手紙の内容が全般的に各課の事務にわたっている点から、他の部隊から科外勤務で参謀本部附となっている人間に違いないし、五項目の内三項が砲兵のことなので或いはその人間が砲兵士官ではないかと意見を述べた。これが人々の賛同を得た。

捜索の範囲は急に狭められた。——参謀本部附となっている砲兵士官の名簿の中で、人々の目にとまったのは、アルフレッド・ドレフュスと云う、アルザス生れの猶太系の砲兵大尉だった。

猶太人なのである。

動いて来た立会の将校たちの頭は、ここで停って動かなくなった。この基督を裏切ったユダの子孫に対して、欧羅巴人全体がいわれなく感じて来た伝統的な憎悪と、常人と差別して考えるように仕込まれて来た民族的な軽蔑が、聡明であるべき参謀将校たちの判断を濁らせたのだった。

誰れの発言に依ったものか、ドレフュス大尉の書いた書類を取寄せて問題の密書と筆蹟と比べて見ることになった。その結果が、判然と、二つの筆蹟は同一だった。——すくなくとも、審査に立会った仏蘭西参謀本部の幹部級の将校たちは、そう見ることに於て一致した。

アルフレッド・ドレフュス。

こうして、この平凡な一砲兵大尉の名が、後の疑獄から欧羅巴全土に伝わることになった。

猶太人が過去を一貫してどんな待遇を受けて来たかと云うことは、事柄があまり不条理で根拠のないために、海を隔てている我々には殆ど理解出来ないくらいである。私の面識のある旧帝政露西亜の外交官だった男は、話の中にレニンやトロツキーの名が出た時に、「彼等はジュウだ。」と云う一語で、きたないものを避けるようにその話を避けて終ったことがある。新しい文学プルーストの読者でありヴァレリの詩の愛好者で、五カ国の言葉を自由に話して教養の深い点でも珍らしいくらいの男でいて、よし彼の現在の個人的な不幸の原因となった人々が話題にのぼっていた場合であろうとも、この一語で万事を云い尽したように思っている彼の単純さが、私には寧ろ不思議だった。

ドレフュス

「なぜ、猶太人であることが悪い？」

と、私は極く自然に反問してから、この質問がひどく相手を考えないものだったと気がついた。またその古い欧羅巴人は、それこそ不思議だと云うように私の顔を見詰め、苦い顔をして黙り込んだのである。——猶太人への蔑視は、欧羅巴人が十数世紀を批評の外に置いて来た心のくら闇の部分なのである。宗教的な信仰と一緒に、闇のまま祖先から伝えられて来て疑わずに、猶太人をけがらわしいもの、きたないもの、人道外のものとして来たのである。

仏蘭西の大革命は、この禁断の区域に手をつけて清算しようと試みた。輝いた千七百八十九年が、この部落の人々に、人権を回復した。けれども、ロベスピエール、ルッソオ、ディドロオ、ヴォルテールを生んだこの国は、同時にリシュリューやエドウァール・ドリュモンの母胎であった。大衆は、絶望的なまでに動かない海なのだ。ロベスピエールが宗教を亡ぼそうとした努力も、「理性」を偶像化して、女神に仕立て花車に載せて革命の都に引き出す悲しい祭をして見せなければならなかった仏蘭西である。人権を得た猶太人を、またもとの部落へ追込もうとする運動が真面目に国民の間に計画されていたので

ある。

普仏戦争の後、猶太人の仏蘭西に住む者が際立って多くなっていた。勤勉な彼等の社会的の進出が際立って目立っていた。政治的には、彼等は革命に依って人権を賦与されただけに、この権利を奪う危険のある専制主義の復活を悦ばず、進歩的な自由主義の立場を採っていた。ブーランジェ将軍を中心とする王党の陰謀に極力反対して共和国を守ったのも、その故であった。それと同時に、帝王ナポレオンの夢をなお残している軍人と、王政時代の努力を挽回しようと努めているカトリックの僧侶を中心とした反動勢力から見れば猶太人に共通した進歩的な立場は、歴史の因襲をはなれて考えても憎悪すべきものであった。この傾向を一段と強めたのは、「金のある猶太人」が実業界に勢力を着々と占めて来たことである。殊にカトリック教徒の預金を集めるのが目的で法王レオ十三世が祝福を与えて設立したユニオン・ジェネラル銀行が破産した際に、放漫な貸出が真実の原因であったが、預金を失ったカトリック教徒は容易にこの破産が猶太系の実業家の陰謀に依ったものと信じさせられたのであった。この事件があってから財界の破綻が起る毎に、ユダの子孫の陰謀が必ず伝えられることになった。その時分には、相当の企業に猶太系の実業家の参加していないことは稀だったから、事件の起る度に猶太人の名を探すのも容易だったのである。共和国に於ける貴族の軍人と僧侶は、この新しい敵を見付け出したと同時に、国民をこの敵から放して味方に附ける有力の材料を発見したわけであった。猶太人の排斥は僧侶と軍人の国粋主義の運動に有利な標語となった。

反猶太同盟が、大通りに看板を掲げて人を集めていた。機関新聞が「自由公論（リーブル・パロル）」と云う、結果は逆説的な表題を掲げて発刊されていて、当時の仏蘭西人はすこしも不思議としていなかったし、これが巧みな計画の下に国粋主義の運動と結びついてから、国民殊（ことに）軍人の間に勢力をひろげていたのである。

審査の結果はすぐに上官に報告せられた。参謀総長ボアデッフル将軍から陸軍大臣メルシエ将軍に。

陸相は閣議へも報告した。

更に問題の密書を筆蹟鑑定の専門家を呼んでその意見を求めた。巴里銀行の署名鑑定家ゴベールは、ドレフュスの筆蹟とくらべて、これは同じ人間が書いたものでないと証言したが、警務局雇の鑑定人ベルチョンは、わざと書体を変えて書いてあるが同一人間の筆蹟に相違ないと断定した。その時はもう部内の意見はドレフュスを逮捕することに決っていたので、メルシエ陸相は躊躇なく逮捕命令を出した。この逮捕にはデュ・パチイ・ドゥ・クラン少佐の意見で、少佐自身が当ることになった。

ドレフュス大尉は十月十三日の土曜日に、次の月曜日の午前九時に検閲を行うから陸軍省に出頭しろと云う命令を受取った。服装を平服着用と指定してあった。普通夜ある検閲を朝やると云うのが変っているし、平服着用と云うのは異例で、大尉にも不審に思われないこともなかったが、そう感じただけで別段深く考えもしなかった。

このアルフレッド・ドレフュスは、アルザス州のミュルーズの生れで、四人兄弟の一番末だったが、アルザスが独逸に割譲せられ、独仏いずれの国籍を採るかは住民が自由に撰択することになったので、一番上の兄が家を継いで故郷に残り、アルフレッドは二人の兄とともに好んで仏蘭西の国籍に残って、そのため巴里へ移住して来たのである。故郷の土地が敵に奪われ仏蘭西人でいる限り再び住むことが出来なくなったと云うのが、青年の心を強く動かさずにはいなかった。アルフレッド・ドレフュスは軍人を志願したし、目的を達してからも熱心な復讐戦の主張者になった。軍人を自分の天職だと考えて誇りにしていたようだし、ナポレオンがこの青年士官の夢だったようである。勉強家で、数学が好きで真面目一方の気性だからあまり同僚の受けはよくなかったが、勤務の方は実直で評判がよく家庭も幸福だった。妻はリュシイと云ってダイヤモンド商人の娘で、実家が富裕なのでドレフュスの家も並の大尉の生活よりは暮し向が楽だった。夫婦の中には、もう二人の子供が儲けられていたのである。

この命令を受けた次の日には、いつも日曜の晩は妻の実家へ夕食に行く習慣だったので、そこへ行って、夜遅く戻って来た。次の朝もいつものように、三つと六カ月

になる子供に門口まで送られて、これもいつものように優しく子供を抱いてやってから、徒歩で陸軍省へ向った。すこし時間が早すぎたので、玄関の前にある庭を散歩してから、内へ入った。霧のあるつめたい朝だった。ピカールと云う少佐が立っていた。

「こちらへ来たまえ。」

と云って、自分の事務室に通して、用もない話を持掛けた。

ドレフュスは初めて、呼ばれたのが自分だけらしいのに気がついた。

ピカール少佐は、暫くしてから、参謀総長の部屋へドレフュスを連れて行った。そこには総長はいないで、デュ・パチイ・ドゥ・クラン少佐がドレフュスの知らない平服の三人の男といて、大尉の敬礼を受けた。その三人と云うのは、あとで判ったが、憲兵総監とその書記と記録係だった。

「将軍は今来られるが……」

と話し掛けたデュ・パチイ少佐の声は、ドレフュスにも、何かしら普通でない調子が感ぜられるものだった。

「それまで、私は手紙を書きたいが、手を痛めているので、君に筆記して貰おう。」

見れば脇の卓(テーブル)にペン軸と紙の用意が出来ていた。ドレフュスが何気なくそれに向って座ると、少佐は椅子を持って来て、ドレフュスの傍(かたわら)に腰掛けた。

少佐が口述してドレフュスに書かせたのは、例の密書の文句だった。一々言葉を区切って口述しながら少佐の目は、ペンを持ったドレフュスの手に凝(じっ)とそそがれていた。

「君、手がふるえておるじゃないか？」

少佐が急に詰問するようにこう云い出したので、そんな筈のなかったドレフュスは吃驚(びっくり)したように振向いた。

少佐は凄い気色で繰返した。

「ふるえている……」

何となく敵意に近いものが感じられるような声である。ドレフュスは自分の手を見詰めた。ふるえているようには信じられなかったが、冷たい外気の中を歩いて来たところだったので、おとなしく、

「手がつめたいのであります。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook